

正常児および発達遅滞児の発育・発達・情動と親子関係

黒川 徹 (九州大学医学部小児科)
松尾 誠 (")

目 的

(1)社会的経済的構造の変遷に伴い親子関係も変化する。われわれはこれまで8年間に亘って福岡市郊外久山町において乳幼児健診を行ってきた。これまでの調査によって、たとえば祖父母との同居の有無などによって乳幼児の身体的側面(たとえば肥満度)のみならず発達の側面(たとえば言語発達)も影響を受けることを明らかにしてきた(日本小児科学会雑誌(1983), 周産期医学(1983))。今後は久山町乳幼児の行動形態あるいは疾病罹患と母子関係の相互作用について調べたい。(2)発達遅滞, てんかんなどを有する心身障害児の両親はその児のために協調することが多いが, 一方離婚に至ることもある。このように家庭に及ぼす影響は大であるが, 一方子どもも親の態度によって影響されやすい。われわれはこれまでてんかん発作の経過が両親の心的状態に影響し, さらにそれが子どもの行動・情緒・人間関係と密接に影響し合うことを報告してきた(Folia Psychiat Neurol Jpn (1983), 周産期医学(1983))。発達遅滞児における親子関係はこれまでもよく研究されてきているが, 訓練による変化と親子関係, てんかんの治療経過と親子関係についてダイナミックな調査をしたい。

方 法

(1)研究対象は久山町全乳幼児(年間出生約90)であり, 面接あるいは直接検査によって発達と行動を評価する。母子関係についてはアンケートのほか田研式親子関係診断テストを用いる。(2)九大病院小児科外来, 心身障害児福祉センター, 県立養護施設新光園などにおける発達遅滞児, てんかん児について行動調査表(Rutterのbehavioral scale), 田研式親子関係を記入する。これらと発達の度合, 発作頻度, 服薬状況との関係を調べる。

計 画

(1)昭和58年度:これまで得られている発達検査, 発育に関するデータを整理する。昭和59年度:行動異常に関するチェックを行ない, 親子関係テストを施行する。このとき保健婦の家庭観察結果を充分に取り入れる。昭和60年度:発育・発達・行動と母子関係の相互作用について分析する。(2)昭和58年度:発達遅滞児, てんかん児における基礎的データの集積。昭和59年度:発育発達・行動異常のチェックと親子関係の調査。昭和60年度:発達・行動異常・けいれん発作の推移と親子関係の変化について調べる。

昭和58年度研究報告

(久山町における学童の親子関係と行動異常について)

福岡市近郊にある久山町の学童534人について, 行動異常と親子関係をRutterの行動評価尺度を用い調べ, 一部田研式親子関係診断テストも行なった。行動評価のtotal scoreでは 6.4 ± 6.6 点(mean \pm SD)で13点以上が異常であり, 全体の15%を占めた。年令別による差はなく, 脳波検査も全員に行なったが, 因果関係はなかった。項目別異常出現率では, 腹痛4.1%, 頭痛2.8%, 落着がない8.8%, 注意力散漫8.2%, 親のいうことをきかない6.9%が目立った。

親子関係テストでは, 消極的拒否, 積極的拒否などの拒否の項目が他の支配, 保護, 服従の項目に比し有意に悪かった($P < 0.01$)。すなわち, ある意味で, 親が子供に対して保護養育の責任放棄の傾向が見られた。前回我々は, てんかん児の親子関係と行動について発表したが, 同じく一般地域においても親子関係と行動異常が密接な関係で成り立っていることが示唆された。